

美浜3号事故の配管破裂部位の「減肉も知らず、点検漏れも知らず」 品質保証体制のない関西電力は責任を免れられない

10・26反原子力の日 関西電力本社を2時間半追及

反原子力の日 of 行動として10月26日、午後6時から美浜3号事故に関し関西電力本社を追及しました。9月29日付けで提出した公開質問状に対する回答も求めました。

プルサーマル計画・中間貯蔵計画の中止、原子炉容器上蓋管台に亀裂の入った大飯3号の運転再開中止、六ヶ所再処理工場の閉鎖ともんじゅ廃炉など核燃料サイクル政策の抜本的転換などを求めた申入書を読み上げ、続いて、今回の美浜3号人身事故に関する責任と配管の品質保証体制の問題を厳しく問い詰めました。

事件の核心部分まで追及 ごまかす曖昧関西電力

破裂した当該部位の減肉について、関西電力は「気が付かなかった」の一点張りでした。日本アームが2003年6月に作成した、第20回定期点検の総括報告書に当該部位を記載し、スケルトン図に反映していたにもかかわらず、「点検漏れそのものに気づかなかったから」と言うのです。

関西電力は「配管の余寿命も計算していない」と言うのです。日本アームの報告書は余寿命の違いを、スケルトン図の中で色分けしているのに、「当該部位は余寿命計算されてなかったので色分けされておらず、その結果長年点検漏れ状態の部位だったことに関西電力は気が付かなかった」というのです。

総括報告書は「紙のベースでもらっている」色の表示は無かったと聞いている等と言うので、カラーならグレーなど濃淡が付くだろうと問い詰めると、「ちょっとすいません。確認はするが」とごまかす。怪しい所です。

余寿命計算の問題では、終始あやふやな関西電力

色分けがされていない理由は、「余寿命を登録していないから」と関西電力は言い出しました。「じゃあ寿命がマイナスになったら何色か」と聞くと、「ちょっとわからない」との回答。

「余寿命を登録しないでコンピュータに入力できるのか」、余寿命を入れなかったらエラーメッセージが出るはずだ」と問い詰めると、「もしかするとシステムが十分にできていなくて」余寿命を評価しなくても登録できるのかということ聞かれて「いるのだと思うが」などとはぐらかす。

総括報告書に余寿命1年未満の部位があったか、無かったかについては「確認できてなかったなので、確認します」と、その場の回答を回避。

私たちは、美浜1・2号で火力発電用のただし書きを無理矢理適用し、1年未満の部位の取り替えを回避していたことの責任を追及しました。

美浜3号で、公表された3箇所以外に余寿命が1年未満の箇所はあったのか」と聞いたら、「2年未満になったら取り替え計画を立案」と、的はずれな返事。「3箇所以外に無いか」と再度聞くと、「それは無いと思う」と、曖昧。「はっきりして」と詰めると、「確認する」と言って次回回しにして逃げました。

スケルトン図の当該部位には新しい番号がふられていたが、余寿命を計算していなかったし、番号自身が「大きい番号で」気づかなかったというのです。でも「点検場所になっていれば、余寿命はわかるだろう」と聞くと、「捜査を進めているし」と話をそらします。

このあたり今回の事故で品質保証体制が問われる中、核心部分となるでしょう

日本アームは2003年11月に当該部位を含めた420箇所の要点検箇所一覧表を、電子メール

で美浜発電所補修課担当者に送り 翌年4月に 関電本社に上げられたにもかかわらず、机の中で眠っていたと言われていますが、担当者は誰かと聞くと、「いやあ、我々の調査では」と言葉を濁していました。

「日本アームが配管の余寿命計算を行っているのは常識だ」と誰もが考えることでも「わからない」ととぼけていました。「余寿命を計算するよう関電として指導しているのか」という本来なら関電に聞くこと自体が失礼な質問にも「やっているはずだ」との答え。

最先端の科学技術を投入した、巨大な機器を駆使する、現代の大企業ともあろう関西電力が、恥ずかしげもなく、「はずだ」とは。無責任さに、一同憤りを隠せませんでした。

「1年以内ならメールは残っているだろう」と聞くと、「うちのシステムは2ヶ月もデータを保存しない。3週間で消えていく」とデータがないかのように振る舞っていました。「メールの送受信記録は残っているはずだ」と詰めると、「そこまで我々は」と、また言葉を濁す。

結局、関電の公式の見解は、「日本アームからメールは受け取っていない」ということでした。

責任は日本アームと発電所の社員にある？

今回の交渉では事故の責任問題が背景にあったのですが、関西電力の責任をできる限り回避しようとの姿勢が至るところで垣間見られました。とくに関電本社の責任問題に発展することを恐れている様子が見られたのが特徴です。

2004年4月に本社に上がったとされる要点検箇所一覧の問題では、「普通は本社にそういう報告があがってくることはない。発電所で決済する」というのです。

現場の実態を踏まえて本社で見ているよりは、機器の実態を見ている方が・・・と弁解しかけたので、こちらが「じゃあ発電所に丸投げで、発電所には一切チェックはしない」のかと詰め寄ると、関電は答えに窮したのか「いやあ、役割分担で

すね」と思わずポロリ。

無責任な関電の言い逃れを許すな

関西電力は、その他多くの点で明確には答えられず、以後「確認する」と回答を先送りしました。関電はこれらの「宿題」についても今後追及の手から逃れられません。

関電が「後日回答」を約束した点を以下にあげておきます。

2003年6月の総括報告書の中に、その時点で余寿命1年未満の部位があったのか、無かったのか。2003年11月の日本アームの要点検箇所一覧表の中に余寿命のカラム(欄)があったか無かったか。2004年4月に美浜発電所から本社に上がった要点検箇所一覧が本社の誰かの机に眠っていたかどうか。オリフィス下流部の点検のとき上流側何cmまで保温材をはずすか。

日本アームの時代に保温材をはがす際に点検部位のマークが見えたのかどうか。また、関電がその場に立ち会ったのかどうか。

12月末までに電話による回答が一部ありました。については点検リストには余寿命記入欄はない、余寿命の入力がなくてもエラーが出るようなコンピュータシステムになっていない、については、保温材は取り外して点検しているが、関電社員の立会記録がなく不明である。驚くべきことに、2004年6月時点で破断部位の点検抜け落ちがわかったにもかかわらず、日本アームは余寿命計算をしていなかった。本当にそうかどうかを社として確認中だ」というのです。また、事故の根本原因がわからないため年内に再発防止策を出せなくなった。年度末を目標に努力している」とのことでした。果たして年度内に、美浜3号事故の抜本的な再発防止策を提示できるのでしょうか。

関西電力の姿勢を徹底して問い続け、5名の死者を出した事故の根本責任を明らかにし、品質保証システムのズサンな関西電力には原発を動かす資格はない」と厳しく追及していきましょう。